

金沢大学がん進展制御研究所－復旦大学上海がんセンター ジョイントシンポジウムを開催しました

2021年9月15日

2021年9月15日、第10回ジョイントシンポジウムをオンライン開催しました。Zhen Chen 復旦大学癌研究所副所長の開会挨拶に続き、同Xin Hu教授とShenglin Huang教授の司会の元、Gnghong Wei教授から前立腺がん発症リスクに関わる遺伝子座、Fei Chen教授からRNAポリメラーゼIIのpausing制御機構、Yizhou Jiang准教授からトリプル陰性乳がんのprecision medicineのお話があり、当研究所からは、大島浩子准教授が胃がんにおけるFOXO3の役割、村上和弘助教が大腸がん幹細胞の未分化性を規定するSOX9、土屋晃介准教授がGasderminによって制御されるpyroptosis系について発表されました。最後に当研究所の松本邦夫所長が謝辞を述べ閉会しました。聴衆は当所教職員39名に加え大学院生約40名、復旦大学もZOOM画像で見える限り相当数の若い方が参加していました。視聴された方はどのようにお感じになったのでしょうか?双方から大変聞き応えのある発表がなされましたが、文責者は、当研究所の目指すサイエンスの方向と復旦大学癌研究所のそれが年々違ってきている感じを受けました。我々のサイエンスがソリストの個人技が光るモオツァルトのピアノ協奏曲とすると、復旦大学のそれは、団体の力が光るリヒャルト・シュトラウスの交響詩の様な感じを受けました。文科省発表「科学技術指標2021」によると、いわゆるトップ10%論文は中国が米国を抜き去って1位、日本は2000年の4位から下降し続け10位、韓国が12位に迫っています。勿論これは科学全分野についてでありますし、トップ10%論文の数だけが科学力を反映するわけではありません。しかし、会の後で何人かの先生と立ち話し、中国の研究力は近年驚異的な進歩を遂げ、いまやその背中も遠くて見えなくなりつつあるという意見もありました。そのことをまさに実感した会となりました。（文責：高橋智聡）



会場の様子



The 10th FUSCC-CRIKU Joint Symposium on Tumor Biology 2021 第十届复旦-金泽肿瘤生物研讨会

September 15th, 2021, 13:30—16:30

2021年9月15日, 13:30—16:30

Venue: Auditorium, Building 10, FUSCC
会议地点: 复旦大学附属肿瘤医院十号楼2楼报告厅

-Organizers-

Fudan University Shanghai Cancer Center, China (FUSCC)

复旦大学附属肿瘤医院 中国

Kanazawa University Cancer Research Institute, Japan (KU-CRI)

金泽大学癌症研究所 日本

